

# にいがた 勤務医ニュース

発行所  
新潟県医師会  
新潟市中央区医学町通 2-13  
TEL 025 (223) 6381

## チエインソーを 糸鋸に持ち替えて

新潟大学医学部総合病院生  
命科学医療センター長・教授

中 田 光



五年前まで、新宿の国立国際医療センターで、肺胞蛋白質の研究のかたわら、結核や稀少肺疾患の患者を診ていた。歌舞伎町や職安が近く、外来は緊張の連続だった。患者の三割は外国人で、偽の診断書を書けと迫る中国人がいたり、痰からガフキー九号が出ていて、頸椎力リエスで腕が動かさないイスラム系の人が来たこともあった。また、組事務所が多

い地域だったので、一見して関係者とわかる人もいた。待合室で大声で看護師さんに怒鳴り散らしていた上半身総入れ墨の男が診察室に入ってくるなり、「俺は癌かもしれないと言われたんだが、どうなんだっ！」というので、いや結核だから真面目に半年薬をのめば治りますよという、ポロポロ泣いて急に神妙になったのが忘れられない。同じ曜日に結核外来をやっていたベテランの女医さんは、ナイフを突き付けられたことがあったという。一度だけ、私も患者の家族と入院させる、いやさせられないの押し問答になり、「頭かち割るぞ！」

と怒鳴られたことがあった。その時は相手が相当に興奮していたので、本当に頭を割られるかと思った。私が悟ったこと、こういうときは、絶対に相手の視線から目をそらさず、できるだけ穏やかに、しかし、毅然として話すのがコツだ。医者という職業が私に言葉を発せさせているのだと自分に言い聞かせた。それに比べると新潟の人は実に穏やかだと思ふ。外来に行ってみてもどなり声ひとつ聞かれない。みんな狭い廊下でじつと診察の順番を待っており、本風土が実に機能している。そう思つて、着任して間もないころ、大学で過ごしてきたある先生に「新潟の人はみんな仲がいいですね」というと、ニコニコしながら、「でもね、先生、陰で目一杯足引っ張りますよ」と言われてはつととした。平成十六年以後、ホームペーJや手当など、ちけんセンターの整備、遺伝力ウンセリング外来の創設、再生医療の立ち上げ、国際共同臨床研究の開始、産学連携事業の開始と生命科学医療センターの立ち上げにスタツプと消耗戦を闘ってきた。その五年間は、その先生のおつしやられた言葉が正しかったと痛感することも多かった。決してあからさまには反対しないが、長い長い話し合いで漸く決まったと思うことでも、実行に移す場面になると、動かないという形での抵抗があった。「新潟は違うんだよ、新潟は」と仰る教授もおられた。

## 故郷に帰って想ひ事

立川総合病院 循環器科 斎藤 淳 志

私はこの原稿を研修医時代を過ごした、兵庫県の淡路島で書いています。私は平成八年に都内の私大医学部を卒業し、初期研修に兵庫立淡路病院を選びました。まだ現在のような研修制度のない時代だったので(あえて言わせてもらえば現在よりも伸び伸びと、保身を考へていたというので、診察をすすめずに良い研修ができる時代でした)、私のような研修医は少なかつたと思います。兵庫に何か縁があったわけでもなく、旅行でも訪れたことのない土地でしたので、まずは言葉(関西弁、正確には淡路弁)に圧倒された事を憶えています。ただ、研修が始まってしまつと本当に忙しかつたので、細かい事に悩む間もなく数ヶ月が過ぎ、一年経つ頃には私も『エセ関西弁』を話すようになっていました。

策をとっている地域もあります(新潟県でもどこかで聞いた事のある話ですが)。一見効率は良さそうですが、そのような地域は高齢者が圧倒的に多いですから、通院するのも大変です。医師側にしても、元々少ない人数でギリギリの診療をしているわけですから、一人辞めると、御想像通りの展開になります。「医師になつてまだ十数年の若輩者が」との批判を承知の上でいわせていただくと、今は日本中の地方で同様の問題が起きているのだらうと思ひます。ですから『県と県の違い』などはあまりなく、『都市部と地方の違い』と言つたほうが様々な問題や相違が見えてくるように感じます。

大樹はチエインソーなら一瞬で倒れるかもしれないが、相対的な抵抗を覚悟しなければならぬ。こちらもダメージを受ける。糸鋸ならば、大樹を倒すのに何年もかかるかもしれないが、倒していることに気づかれずに世代交代が進んで、大樹はやがて倒れ、育てた苗木が枝を伸ばす環境ができると思うのである。

最後に、新潟県に戻つてきて良かったと思ふ事をいくつか。まず、明らかに待遇(給与も含め)が良い。次に何かと批判されがちな医局制度ではあるが、医師の配置面では今現在で最高位の制度であり、新潟県は優れている。次はとも狭い領域の話ではありますが、ワーフアリンを○・一mg単位で調整している事、関西ではあり得ません(?)。最後はやはりお酒がおいしい、これに尽きます。新潟に戻つてきてまだ四年半ですが、少しでも地域の力になれる様にならばいいと思ひますのでよろしくお願ひいたします。

## 他県での医療 経験者から見た 新潟の医療



## 沖縄から来て

新潟市民病院 外科 赤松 道成

今年の二月、新潟市民病院への挨拶とアパルト探しの目的で、初めて新潟に来ました。天気予報を見て

出発の前の週にあわててダウンジャケットを買いました。那覇空港をでるとき気温は二十四度でした。新潟空港についでみると雪がちらつき、あまりの寒さにここで一年間住めるかと心配しました。しかし四月からいざ住んでみると、お米も魚も野菜も食べるのがみな美味しく、自然が豊かで妻も私もすっかり新潟が気に入つてしまいました。職場でも多くの良い先生方に恵まれ、非常に楽しく、充実し

た毎日(過)かしてあります。仕事では上部消化器外科グループで、主に食道癌、胃癌の治療に当たらせていただいています。ですが、当初、胃癌患者の多さに驚かされました。当院では外科で昨年約一九〇例の胃癌手術症例がありました。また消化器内科でも約一六〇例の胃癌内視鏡治療症例があり、のべ約三五〇例の胃癌を治療しました。沖縄では胃癌は少なく、県内年間胃癌診断数が約三五〇例、手術症例は県内全部で二〇〇例程度です。県内に十五を超える総合病院があることを考えますと、必然的に一人の外科医が年間に手術をする胃癌の症例数も限られてきます。しかし市民病院では沖縄県内全部で施行されている手術件数と同等の症例を、一施設、三人の外科医で行なうのです。多くの手術を執刀させていただき、日々たくさんのご学ばせていただいています。術式についても、沖縄では胃癌、食道癌ともに開腹、開胸手術が一般的で、腹腔鏡、胸腔鏡手術は極一部しか行われていません。しかし当院では胃癌、食道癌手術症例ともに約七十五%を鏡視下手術で行っています。患者さんの負担を考えると、ぜひ沖縄でもそうなることを感じます。

もう一点、新潟と沖縄で感じる違いは手術患者の体格です。二〇〇四年度の統計になります。沖縄県は日本一太った方が多い県であり、逆に新潟は最も少ない県でした。BMIが二十五以上の割合でいくと男性は沖縄県が四六・九%(全国一位)、新潟県が二五・二%(全国四十七位/四十七県中)、女性は沖縄県が二六・一%(全国一位)、新潟県が一六・〇%(全国四十四位/四十七県中)でした。ご存知のように癌の手術の場合、病変臓器だけでなく周囲のリンパ節も郭清します。この際、体格の良い方ほど血管、リンパ節が見えず切除する脂肪も多くなり、手術に難渋します。まして鏡視下手術の場合、視野がとりづらく、手術時間、出血量も増加します。当然術後の合併症にも影響します。市民病院

# 他県出身の新米外科医が 新潟へ来て感じたこと

新潟大学大学院医歯学総合  
研究科 呼吸循環外科分野

白石 修一



他県から来た下さいました。勿論、様々な部分でカルチャーショックを受けた点の医療については、それらを親切に感じて頂き、徐々にその環境に慣れていくことが出来た。さらには、外科医の卵である私に十分なトレーニングの場を与えて頂き、心臓血管外科の専門医を取得する

での生活は三年とまだ日は浅いのですが、これまでに感じたことを新米外科医の立場から書こうと思

私は四国の大学を卒業後に関連病院で初期研修を受け、大阪の病院で勤務した後に平成十六年に初めて新潟へ来ました。ローテーション制度はまだなく医局の壁が今よりも高く感じられていた頃でしたので、ほとんど知り合いのいない医局へ入ることへの不安は相当なものであり、その不安は今でもよく覚えています。新潟大学のよ

うに古い歴史のある大学が県外から来る人間を受け入れてくれるの

## 命の薬Ⅱヌチグスイ

新潟県立がんセンター  
新潟病院 外科 天願 敬



皆様こんにちは。お花見もちらと

病院で研修をさせて頂いて、早くも

春のお花見は、日本一早い一月

# 長岡に帰って思い出す 富山県の方言と医療

長岡西病院 内科医長 福居 和人



富山県でのことになりました。ちよつとした倦

あり、例えば「胸がウイ」のよう

## 県外から見た新潟の医療

厚生連長岡中央総合  
病院 呼吸器外科医長 古屋敷 剛



平成二十一年四月より新

長岡は十年前にも三年間同院に

合が高いのもまた事実です。かた

研修生活を送る決意です。

あり得ます。ですから医療者の側

から、ことさらに注意深く病状を

探らないと痛い目に遭う、説明

してちゃんと理解しているかど

うか確認するという姿勢が必要と

なっています。それに対して、新

潟の患者さんの訴えは非常に解り

やすい。私が長岡の地元に戻って

来た、という理由もありませんが、

標準語から逸脱した特異な単語表

○ mmHg でも正常だと思ってい

る患者さんいます。認知症では

なさそうなんです。どなたも「主治

医の先生が何も言わなかったから

と口を揃え、長岡の医療は方言と

は別のところにコミュニケーション

障害が挟まっているのではない

かと危惧します。「患者は長年の

経過で既に分つてゐる筈である

」と思つても、長年の経過で双方

## 編集後記

今回は県外出身で、または県外

で医療経験を積まれて、現在は新

潟の医療に携わっておられる七名

(月岡)